

立教の英語教育で学んだこと

伊藤 美絵

「モラトリアム」とも呼ばれる大学時代ではあるが、「大学ではこれやったのだ」というものがほしくて、2年次から「インテンシブ」を取り、英語をがんばることにした。「インテンシブ」は「英語が好き」、「もっと勉強したい」という想いに答えてくれる授業だった。週4回の授業や、課題に多くの時間を費やしているうちに、やがてインテンシブは大学生活において大きな比重をしめるようになった。

テーマは日米関係、ブリティッシュ・スタディーズ、食文化、ジェンダーなど多岐にわたっていた。「英語」そのものを学ぶのではなく、「英語」を使って、何をどのように伝えるか、ツールとしての英語を学んだ。また様々な社会問題に対して、自分はどうのようなスタンスをとるか考える場となった。授業形態もプレゼンテーション、グループ・ディスカッション、ディベートと参加型のスタイルが多く、躍動的であった。ディベートの作戦を練るために昼休みに集まったり、白熱したディスカッションを授業後にまで引きずり、いつまでも喫茶店で話したり、

活発なクラスメートにも恵まれた。時にはクラスにゲスト・スピーカーを招き、例えば国際結婚をした人の生の声を聞いたり、受講者がたまたま来日していたアメリカ人の友達を連れて来たり、クラスはいつも刺激的であった。プロを感じさせる一流の先生や、モチベーションを上げてくれる個性的なクラスメートの魅力にとりつかれて、気づけば3年連続受講していた。「インテンシブ」を通してできた勉強や出会いは、立教ライフの宝物であり、学生時代の結晶だと思っている。

現在、私はホテルで働き出して2年目になる。ホテルは、様々な国の人が出入りする日本の窓口。世界中の人に家("Home, away from home")を提供し、非日常的な空間の演出により社会に潤いを与えたい、人へのホスピタリティー精神を高めながら、日本を伝えいくことに、終わらない勉強を重ねていきたいと、色んな目標と希望を持ってこの世界に飛び込んだ。

そもそもホテル業に興味を持つようになったのも、立教での英語教育を通

して、「母国を飛び出し旅する心」が芽生え、「文化交流」と名のつくものや、旅人を受け入れもてなすことが好きになったからだと思う。しかし「海外に行きたい」「英語を使いたい」「外国人の接客がしたい」という思いが根本にありながらも、入社して最初に経験したのは、ロビーにあるコーヒールウンジだった。その後、フレンチレストラン、宴会スタッフ、ベルガールなど、現場の末端な仕事を経験する1年間のOJT (On the Job Training) は続いた。回り道とも思えたこの研修によって、まったく興味がなかった飲料のあれこれを勉強したり、水一杯つぐことにいくつものおもてなしの心があることを発見したり、実はとても楽しい研修だった。東京のビジネス客が多いホテルと、箱根の古いリゾートホテルの2カ所での経験を経て、現在は東京で営業部宿泊課に属し、希望であったロビーサービスに徹している毎日だ。

東京駅に近いこともあって、ここは外国人のお客様がとても多い。ワールド・カップの時は外国人ゲストで埋め尽くされたし、平日も出張のビジネスマンやリピーターが多くやってくる。お客様は英語圏の方だけではなく、英語も日本語もまったく話せない中国人やフランス人、ロシア人も多い。ホテル内の案内や、ツアーやチケットの手配、東京周辺の観光案内のために英語を使うことは多いが、英語が通じない

お客様に対しては、写真を使ったり、身振り手振りで説明する。伝えたいことがあって、それを伝えるための確かな英語を考えたり、知識を増やしたりする。「インテンシブ」でやったディベートに似ている気がする。

「インテンシブ」は、歴史や文化背景まで理解していないと意見を言えないような深いテーマを取り上げ、難しい英語の文献を読み、意見を言えば、必ずといっていいほど反論が返ってくる授業だった。そんな「インテンシブ」を3年間やってきたことによって、社会でも通用する「英語なら任せて」という妙な自信と、大舞台でもものおじをしない度胸を得たと思う。海外からの問い合わせに積極的に対応できるのも、レストランのメニューや看板の英語バージョンを作るという時に協力できるのも、「インテンシブ」をやってきたのだから、一流の先生に習ってきたのだから、という誇りがあるからだと思う。

企業という組織の一員になると、例えば、「外国人ゲストのリピーターの増加」を数字としての結果で求められたり、日々の忙しさに埋もれたりして、学生の頃抱いていた目標を忘れてしまったりする。そんな時に、英語を苦手としているホテル・スクールの研修生が、外国人のお客様にたどたどしくもコミュニケーションを取っている姿を見ると、ジェンダー問題で言いたいこ

とが多すぎて言葉につまっていたクラスメートの姿と重なってきて、「インテンシブ」の日々を思い出したりする。流暢でなくてもいい、身振り手振り、単語を並べるだけでも、伝えたいことがあって、伝えようとする姿勢が大事なのだ、という「インテンシブ」精神が、人と人の、そして国と国のコミュニケーションの第一歩だということを思い出させてくれる。そんな姿勢をなくさずに、ホテルを通して、「民間外交官」のような人になれないものか、とロビーに立つ毎日だ。

いとう みえ

(本学文学部教育学科 2001 年度卒業)